深紅の葛藤

深紅の葛藤

じょうじ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15722715

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, ダイ大小説50users入り

原作終了後設定です。未読の方ご注意ください。
また原作のイメージを重視される方はお控えいただいたほうがいいかと思います。
終戦後、久々に会ったヒュンケルとマァムの一コマです。

鬼岩城編の視聴を終えて、無性にサクッと可愛いハッピーエンドが書きたくなって、ヒュンケルから業を取り除いてみました。ハッピーエンドにはなりませんでしたが、彼にはマァムのピュア爆弾でやられてほしいです。

※前回までのブクマ、コメント、いいねありがとうございました！
励みになっています(*^_^*)

Table of Contents

深紅の葛藤

　さあ戦士さま
　貴方はその方を何色に染めたいとお思いで？
　その言葉に彼は迷うことなく一つを指さした。

「元気そうだな、マァム」

パプニカ王宮の回廊で掛けられた声に、マァムは満面の笑みで振り返った。

「ヒュンケル久しぶり！いつぶりかしら？」
「前回の姫への報告で会ったとき以来だから半年ぶりだな」

大戦の終結から一年。マァムはポップとメルルと、ヒュンケルはラーハルトとエイミとの旅を続けている。お互いに各地を転々としているから、顔を合わせる機会はレオナへの報告でパプニカの王城に来るタイミングくらいしかなかった。

体は大丈夫なのかしら？ダイの捜索に何か進展はあったかしら？他にも何か変わったことはないかしら？
そんなことを考えていたら、すべて表情に出ていたらしい。兄弟子はわずかに目を細めて言った。

「少し話をしようか」

──ポップと一緒に行くわ。アバンの使徒の長姉として。だからあなたはしっかり体を治して──

そうヒュンケルに告げたのは、ポップがダイを捜索に行くとマァムに伝えた翌日だった。ポップはマァムに対してついてきてほしいと口にはしなかったが、それでも同行すると言うととても喜んでくれた。

そのことを伝えると、ヒュンケルはほんの少しだけ眉根を寄せて頼むと答えた。その表情にマァムは弟弟子を守れない無念さを感じたのだった。

中庭にある青い屋根のガゼボはちょうど無人だった。備え付けの白いベンチに腰掛けると、涼しい風が通り抜けた。

そしてヒュンケルの体のこと、ダイの捜索状況などをひとしきり話した後で、切り出したのはヒュンケルの方だった。

「で、ポップとはどうなっている？」

やっぱり聞かれちゃったな、とマァムは内心苦笑した。そもそもあの闘いの中で、想いを確かめろと言ったのは彼なのだから。

「ポップといるとね、とても居心地がいいの。相変わらずドジしたりもするけど、なんだかんだで自分で解決しちゃって、すごく成長してると思う」

それはこの一年共に旅をしてきても変わらない、変われなかった想い。
マァムのどっちつかずの返事にヒュンケルは穏やかに核心に迫る質問を重ねた。

「男として、愛せそうか？」
「・・・それは、まだわからない、かな」

まっすぐに気持ちを告げてきてくれたポップに誠実に答えたいから、いろいろ考えてみた。でももしかして旅の始めがアバンの使徒の長姉として、という意識からだったからかもしれないけど、危なっかしくてどきどきすることはあっても、男の人としてどきどきする、というようなことは今のところなかった。

「男の人だなあって思うことは増えてきたわ。最近また身長も伸びたし、肩幅も広くなって」

この一年で背の伸びた今のポップを思い描く。すると自然に彼に寄り添うメルルの姿も浮かんだ。

「ただね、もし私たちが、恋人同士になったとしても、それは長続きしないと思うわ。私がポップに振られちゃうと思う」

もし私がポップだったら絶対にメルルを選ぶ。

もし仮に私がポップと付き合っても、メルルと比べられてすぐに幻滅される自信がある。
綺麗で健気で、慎ましいけど強い、ポップをまっすぐに見つめる女の子。

女子としての意識も格段に違う。
たとえば指一本。私は爪さえ短く切っていればいいくらい。でもメルルは毎日きちんと保湿して、爪を整えて、時々は柔らかなピンクに染めている。
それを綺麗ね、と誉めると自分は占いの時にお客さんに見られるから気をつけているだけです、私はポップさんや私を守ってくれるマァムさんの手が大好きですよ、と逆に誉めてくれる。

ポップのことが好きすぎて突拍子もないことをすることもあるけど、そんな姿も含めて密かに尊敬してしまう。

だけどメルルを見ていて一番思ってしまうのは。

「もしかすると私には誰かを男性として愛する資質がないのかも」

マァムがポップとメルルとの旅を一年続けて最近感じていることはこれだった。

メルルはポップの一挙手一投足に反応する。それどころか視線一つにすら敏感だ。
柔らかく染めた爪にポップが気がつけば頬も染めて喜ぶ。ポップの爪が伸びていれば、よいタイミングでさりげなく爪やすりを差し出す。
あんなに誰か一人を見つめて、その人の反応に一喜一憂すること

は、私は経験したことがないし、これからもできる気がしない。

春になると雪が溶けて花が咲くように、どうしてみんな当り前のように誰かを愛するようになるんだろう。
あれほど想いをぶつけてくれて、助けてくれるポップにどうして男性としてどきどきしないんだろう。
もしかしたら、私は人よりも強い力の代わりに男の人を特別に愛する感情は芽生えないようになってるんじゃないだろうか。

このところずっと胸の奥でわだかまっている考えにマァムは黙り込んでしまった。

沈黙を破ったのはヒュンケルだった。

「お前は愛せる」
「え？」
「だが、万人を愛すことに比べて、特別に一人を愛す機会は生涯にそうそうあるものではないのだろう」
「・・・・・・」
「だからあせらなくていい」

マァムは目を見開いた。
兄弟子の言葉がすとんと胸に落ちた。
彼女が誰にも言えずに一人で抱え込んでしまったもやもやを、その剣さばきさながらに鮮やかに斬り伏せてしまった。やはりこの人は五つも年上の大人の男の人なのだ。

「・・・ありがとう、ヒュンケル」

胸に広がる安堵をそのまま口にすると、兄弟子は目だけで優しく笑った。
その瞳があまりに柔らかかったものだから、ふと思ってしまった。
このひとにも、もう女性として愛している人がいるんじゃないかと。

ポップがまっすぐに自分に向けてくれているように、メルルがポップをひたむきにみつめているように、あるいはエイミさんがこのひとを情熱的に追いかけるように、このひとにももう愛している人がいるのかもしれない。

だってこのひとは五つも年上の大人の男の人なのだから。

「ヒュンケルには・・・」

誰か愛している人がいるの？と聞きかけて、そこから口にできなかった。聞いてしまえば、何か取り返しのつかないことになる気がして。

例えば、彼の口からエイミさんの名が出てきたら、私はどう思うのだろう。ただでさえ、ヒュンケルとエイミさんはもう一年も共に旅をしている仲だ。私がメルルのことを呼び捨てにするようになったように、彼もいつの間にかエイミさんを呼び捨てにしていた。
そこにはきっといろんな意味がある気がする。

「どうした？」
「ううん。ヒュンケルには助けてもらってばかりだなあって思って」

マァムはヒュンケルに笑って見せた。
胸に、何か言葉にできない感情がある限り、その感情の名前がわからない限り、この質問をしてはいけない、そんなふうに感じながら。

風がふわりと二人の髪を撫でていった。
その風にマァムは前を向いた。

もう行かなくちゃ。名残惜しいけれど、そう思っているのは自分だけで、ヒュンケルはそうじゃないかもしれない。ポップは口ではいろいろ言うけど、ヒュンケルはなんだかんだ面倒見のいい人だから、妹弟子の話を聞いてくれた。でも本当は誰か大事な人を待たせているかもしれない。

別れの挨拶を切り出そうとしたときに、ヒュンケルは白いハンカチに包まれた何かを取り出した。

「おまえに受け取ってほしいものがある」
「私に？」

まっさらなハンカチを開いて出てきたのは、マァムの人差し指をひとまわり太くしたほどの大きさで、繊細な細工が施された銀色の小筒だった。
これほど立派なものは見たことはなかったけど、マァムにもそれが口紅であることはすぐにわかった。

「少し前に魔物に襲われている馬車を助けたのだが、それがこういうものを専門に取り扱う行商人だった。どうしても礼がしたいと押し付けられたものだが、おまえにもらってほしい」
「本当にいいの？とても高価なものだと思うけど」

「無論だ」

確かにこれはヒュンケルにはいらないものだろう。あげるとしたら身近にいるエイミさんか、同じアバンの使徒の妹弟子のレオナか私くらいになるのかもしれない。
エイミさんはいつも素敵な口紅をしていたから他にはいらないのかもしれない。レオナに至っては口紅どころか御化粧係までいる。なら消去法で私にというのは納得できる。

「ありがとう、大切にするわ」
「気に入ってもらえれば嬉しい」

このまま別れの挨拶をする流れかな、と思っていたマァムは、しかしそれを切り出せなかった。
ヒュンケルが動く気配が全くないのだ。それどころか、何かを待っている雰囲気すら感じる。

（どうしよう、頂いたものを開けるべき？）

頂いたものを今ここで見るのと、宿に戻って見るのはどちらが礼儀に適っているのだろう。
ヒュンケルを見ると、やはり何かを待っているように見えた。ならば、ここは贈り主の希望に沿うべきだろう。

「開けて見てもいい？」
「勿論だ」

どうやら正解だったらしいことに安心しながらマァムは口紅の蓋を抜いた。そして動きが止まってしまった。

（え？）

そこにあったのは赤に赤を重ねたような深紅。
その容赦ない存在感にマァムは怯（ひる）んでしまった。

頂いたものに、文句なんてとんでもないけど、これはきっと、私には似合わない。

これが似合うのはヒュンケルの傍にいるあの女性のような、情熱的で艶っぽいひとだ。
そう気づいて心臓がわしづかみされらようような痛みを覚えた。

「・・・ごめんなさい、やっぱりもらえない」

ヒュンケルがどうしてエイミさんに渡さなかったのかはわからないけど、少なくとも私がもらっていいものではない。
ここでちゃんと返しておかなければ、本当に贈りたい人へは絶対に届かなくなってしまう。
マァムは口紅に蓋をするとヒュンケルに差し出した。

「私よりももっと似合う人がいると思うの。その人に渡してあげて。本当にごめんなさい」

ヒュンケルはわずかに驚いたような表情を見せたが、すぐに目を優しくして口端をあげた。

「こちらこそ、すまなかった。おまえにと思って選んだが、おまえの好みを考慮していなかった。気にしないでくれ」
「ヒュンケルが選んだの？私に？」

マァムは目を丸くした。さっきまでの胸の痛みは不思議ともうどこ

にもない。

「行商人からは三本押し付けられたのだが、その中でおまえに似合うと思った一本だけをもらった」
「え！じゃあ、やっぱりください！」
「ああ。最初からおまえのものだ」

穏やかに笑うヒュンケルに、マァムは差し出していた口紅を大切に胸元に引き寄せた。
似合わないんじゃないかという不安はあるけど、そんなことより彼が自分に選んでくれたということがずっとずっと嬉しい。

「二転三転させてごめんなさい」
「いや、むしろおまえの好みに合わないものを押し付けて申し訳ない」
「そんなことないわ！ただこんな大人っぽい色を使ったことがなくて、どうなるかなって思っただけなの」

マァムだって冬の乾燥した時期に、唇が切れてしまってリップバームを塗ることはある。だがそれは無色かせいぜい薄いピンクだ。
こんな目立つ色を自分の唇に塗るなんて考えもしなかった。

「なら差してみればいい」
「うん。部屋に戻ってから試してみるね」

するとヒュンケルは何かを案じるように太い眉根を寄せた。

「おまえの趣向を無視して渡してしまったものが、おまえの迷惑にならないか心配なのだが」
「そんなわけないわ。意外だったけど、見るだけでも充分綺麗な色だと思うもの」
「見るだけでは意味がないものだ。できれば似合っているか、いまこの目で確かめたい」
「・・・・・」

たぶん、いまここで口紅を塗れば、ヒュンケルは安心できるのだろう。でも私にはできない。マァムは少し自分が情けなくなった。
エイミさんやメルルなら、もしかしたら手鏡を持ち歩いているかもしれない。そしたらこんなときでも相手に見せることができたのに。

「マァム？」

気遣わしげなヒュンケルの声が聞える。
次に会ったときには絶対に感想を伝えよう。できればお礼の品も添えて。
マァムはヒュンケルを見上げた。

「私、鏡持ってないから、いま塗れないの」
「そうか。ならば」

大きな手が差し出された。
武器を持つ人の硬い手のひらには何も載っておらず、ヒュンケルの意図が全くわからない。
戸惑うマァムにヒュンケルはもう一度声をかける。

「口紅を」

促されるままに手のひらの熱で温まってしまった口紅を渡す。
似合うかどうかわからないから、渡すのを止める、などという人ではないと思う。私に似合うと思ったものを選んだと言っていたし。

訳がわからないままマァムはヒュンケルの動作をひらすら目で追った。
彼はマァムから受け取った口紅の蓋を外すと、蓋を最初に口紅を包

んでいた白いハンカチの上にそっと置いた。それから口紅の下部を少し捩じると鮮烈な深紅がちらりと頭を覗かせた。

そこでヒュンケルが体全体をマァムに向けたので、二人の目があった。

「失礼する」

口紅を持っていない左手が伸びてきて、頤（おとがい）に触れてわずかに顔を上げられる。強い力がかかっているわけでもないのに、なぜか自分の意志では動けない。

そしてヒュンケルの視線が外れた。
外れて私の唇に落ちた、気がする。

体は動けないながら、頭の中でいろんな考えが目まぐるしく浮かんでは消えていく。
が、最後に、まさかヒュンケルは自分の手で私に口紅を塗ろうとしているのではないだろうか、との考えにいたった。

「あのっ・・・・・・」

顔が熱い。額に汗が浮かぶ。
心臓がバクバクして、暴走しはじめた。

化粧師ではない男性が女性に口紅を塗る、というのはとても特別なことだと思う。
なのにヒュンケルの表情はいつもと全く変わらない。いつもと変わらない表情で、私の唇を見つめている。

たぶん、このひとは口紅を塗薬か何かと同じに思っているのだ。そう、だから。他の誰でもなくて傷の絶えない私にくれたのだ。薬の効き目が気になっていまここで見たいなんて言ったのだ。薬だか

ら、こんなにも普通に唇に塗ろうとするのだ。

そんなことを考えていたら、急に視線がかち合った。
するとそれまで普通だったヒュンケルの顔が微かに和らいだ。その表情はどこか照れているようにも見えて、彼を少年のようにも見せた。そしていつもより幼いように感じる目をしながら囁いた。

「おまえはこのままで充分美しいのに、オレの我儘に付き合わせてすまない」

もう、むり。
マァムの思考はショートした。
もう考えない、そう思ったのにヒュンケルと目が合うとまたいっぱいいっぱいになってしまう。
マァムは固く目を瞑った。
目を瞑ると今度は自分の早い呼吸が聞こえてきた。このままでは息がヒュンケルの手にかかってしまう。それは絶対やだ。よし息を止めよう。

マァムが呼吸を止めたことにヒュンケルはさすがにすぐに気がついた。

「マァム、深呼吸を」

ヒュンケルに促されるまま、深呼吸を数回繰り返すと少し息苦しさは落ち着いてきた。けれど自分の心臓がものすごい早さで早鐘を打ち続けるのはかわらない。

「緊張しなくていい。力を抜いて。少し口を開いて、深呼吸を続けてくれ」

今はもう何も考えられないから、ただひたすらヒュンケルの指示に従う。
目を固く閉じたまま、薄く唇を開いて、大きく深呼吸を数回繰り返すと、不意に唇に何かが触れた。

「っ・・・・・・・！」

少し冷たくて柔らかいそれは口紅だ。
自分で塗るリップバームに似ているからわかる。

けれど、唇に当てられる力加減が違う。自分でするよりずっと優しい。その動きもゆっくりで丁寧だ。

──ああ、そう、いま、
私はヒュンケルに口紅を差されているのだ

やがて頤（おとがい）に添えられていた手が離れた。
すでに口紅も唇から離れていたから、終わったのだと思った。

マァムはゆっくり目を開くと、そのまま目を伏せた。
似合うか、似合わないか、よりも、ヒュンケルにどう見えているかが気になる。
視線をあげるだけでヒュンケルの表情は見えるはずだけど、それを

知る勇気がない。

どうすることできずに、ただ時間が過ぎゆく。
やがてヒュンケルに近い方の肩に手が掛けられ、耳元で低く囁かれた。

「綺麗だ」

たった一言。
それだけで充分だった。
それまで心を占めていた不安や緊張や羞恥心が跡形もなく消え失せ、かわりに何かが不思議な色の柔らかなもので胸がいっぱいになる。

面映ゆくて、ヒュンケルの顔を見るのも恥ずかしかったけど、ありがとうと言うために視線をあげた。唇がありがとうの「あ」を形作ったときに、白いハンカチでそこが押さえられた。

「少し唇からはみ出してしまった。すまないが、一度拭き取る」

マァムに不安や緊張や羞恥心はもうない。
穏やかな声にマァムはヒュンケルを見つめた。
声は穏やかだけど、唇を見つめている彼の瞳の奥底は、なにかいろんなものが蠢いているように見える。

「ヒュンケルは好き？」

大きく目が見開かれ、そこにあったいろんな感情が純粋な驚きだけに置きかわった。
唇に薄い布越しに感じていた、自分よりも高い体温の動きが止まる。

「この口紅、ヒュンケルは好き？」

似合う、似合わないじゃない。
ヒュンケルがこれを好きかどうか、それだけが気になった。

しばらくして。
ヒュンケルはその目を愛おしげにを細めた。

「とても好きだ」
「そう、嬉しい」

視線が絡みあい、どちらからともなく微笑みあった。
穏やかで、嬉しいのに、なぜか心臓が高鳴る。
なんだかもっとくっついてたいな、そう思ったとき、頭を優しく撫でられた。それはまるで大人が子どもにするように。

「だが、これもいい」

ヒュンケルはマァムの唇を指さした。

その仕草にマァムは自分の唇を人差し指で触れながら小首を傾げた。

「口紅が落としきれなくて、まだおまえの唇を彩っている。それも今のおまえにとても似合っている」

マァムは目を丸くした。
口紅っていろんな塗り方があるのね。お化粧って難しい・・・・・・

「じゃあ、私、いっぱい練習するわ。次に会うときに、もっと好きになってもらうように！」

言い終わってマァムはあら？と思った。
ヒュンケルの耳が赤くなっているような気がする。
もしかしたら傾き始めた太陽のせいなのかもしれない。

気づけば、風も冷たくなっている。
マァムは立ち上がった。

「私、そろそろ行くわね」
「あ、ああ」

その言葉に促されるようにヒュンケルはマァムに口紅を手渡した。

「大切にするわ。本当にありがとう！またね」
「ああ。また会おう」

ガゼボを後にしたマァムは、途中で振り返ってヒュンケルがまだこちらを見ていることを確認すると大きく手を振った。

ヒュンケルもそれに手を振って返し、彼女の姿が見えなくなると、大きくため息をついた。

単独で行動中に魔物の襲撃から救けた馬車の主は物腰が柔らかく、話術の巧みなヒュンケルより二つ三つ年嵩の商人だった。

そのままではまた魔物や野盗に襲われかねないので最寄りの街まで送ることにしたのだが、商人は道すがらいろいろな話をしてくれた。
お喋りは好まないヒュンケルではあるが、商人との道行は存外に興味深いものだった。彼はこちらを詮索することがなかったし、何よりも自分の商いに誇りをもっていた。

思いがけない道中が終わりに近づいた頃、商人は三本の小筒を取り出し、それぞれを少し繰り出してヒュンケルにその色味を見せた。
深く濃い赤に、柔らかなピンク、少し透明感のある白だった。

「私は化粧品を商（あきな）っているとは思っていません。その方がなりたい姿で望む未来を手に入れるお手伝いの対価を頂いていると思っています。
生命を救けて頂いたお礼に、戦士さまの大切な方が望まれる未来になりますよう、どうぞお受け取りください」

自然とマァムの顔が思い浮かんだ。だが彼女のなりたい姿も、望む未来もわからない。それどころか好きな色さえも知らなかった。
顔を曇らせたヒュンケルに商人は言葉を重ねた。

「あるいは戦士さまがその方に望まれる色を選ばれてもいいと思います。必ずいいものがご覧になれますよ」

その言葉にヒュンケルの視線は定まった。
自分がマァムに望む色は、年若い妹に対するような柔らかいピンクではなく、唇を彩ることを不必要とするような天使の色でもない。

赤に赤を重ねたような深紅だ。
激しく情熱的に求め合い、深く容赦なく愛し合う。彼女に望むのはそんな未来だ。

商人はヒュンケルの心が決まったのを感じると、にこやかに微笑んだ。

「さあ戦士さま
　貴方はその方を何色に染めたいとお思いで？」

独り残されたガゼボでヒュンケルはため息をついた。

確かにいいものが見れた。想像以上だった。
この一年間、まともに会えなかった分を取り戻せたと思うくらい収穫があった。

だが、口紅を差したマァムの顔を誰にも見られたくなくて、深紅をハンカチで拭い取ったことで気がついてしまった。

今はまだ深紅をしっかりその唇に載せるよりも、ほんの僅かな色味を添えるくらいのほうが似合っていた。
つまり、そういうことだ。
彼女はまだ少女から大人への過渡期なのだ。

大人の男たちに代わって村を守るという背伸びをしていた彼女の子供時代は、平和がやってきたことによって多少長引いているのかもしれない。
その彼女に愛を囁くということは、やっと出会えた力を抜いて寄りかかることのできる兄弟子という存在をとりあげるということだ。

少女時代には限りがある。
好きなのかと聞いてきた無垢な眼差しは、かけがえのないもので、大人になるといつしか失くしてしまう。
ならばその時期が終わるまでは兄弟子としてマァムを支えてやるべきだろう。

ヒュンケルはもう一度ため息をつくと、白いハンカチに残った深紅にそっと口づけた。

かけがえのない今も大切にしてほしい。
けれど早く大人になってほしいとも思う。

黄昏の光が消えゆく中、ヒュンケルの唇には白いハンカチから移された深紅が残っていた。